

群馬・三ツ寺Ⅱ遺跡

- 1 所在地 群馬県群馬郡群馬町大字三ツ寺字藤塚道上
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)八月
- 3 発掘機関 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 下城 正・女屋和志雄・小安和順・新井順二
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文・歴史時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



1 三ツ寺Ⅱ遺跡 (前橋・榛名山)
2 三ツ寺Ⅰ遺跡

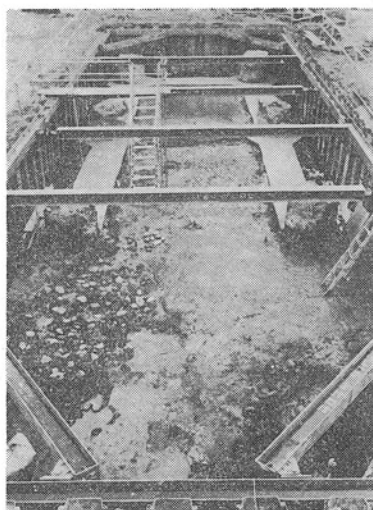
三ツ寺Ⅱ遺跡は、上越新幹線の建設に伴い事前調査されたものである。同じ路線内には、三ツ寺Ⅰ、熊野堂遺跡等が続き、また西約1kmには保渡田三古墳(愛宕塚・八幡塚・薬師塚)があり、東約4kmには上野国分寺跡と、弥生・歴史時代にかけての遺跡が連続する一画にある。

遺跡の範囲は、南北四〇〇m、東西二〇〇

mと推定され、調査では縄文・歴史時代の堅穴住居跡約二五〇棟が検出されている。木簡が出土したのは、遺跡の南端、三ツ寺Ⅰ遺跡との間に広がる水田部で、埋没した低台地の先端部に相当する。検出された遺構は、井戸一基、それに付随する溝一条と石垣状遺構の一部である。井戸と溝は一連のもので、周辺遺跡で類似がある溜井と推定される。井戸は石組みの形跡を持つ、深さ約1mの円筒形、溝は、上幅約1mで両側に石垣を持ち、南半分は、上幅を4m以上に広げ石敷部分となる。この井戸及び溝と石垣状の遺構とは、覆土の状態から時期差があると考えられる。

遺物は、溝の石敷部分から石垣状の遺構にかけて最も多く出土し、木簡もこれに含まれる。土器が主で、土師器・須恵器ともに杯が圧倒的な量を占め、年代的には七世紀末～九世紀初頭頃に比定される。杯類の中に、約一四五点の墨書があり、木簡と並んで特徴的遺物となっている。文字として、「奉」・「葭田」・「上」の順に多く、八世紀前半代に「奉」が、八世紀後半代～九世紀にかけて「葭田」・「上」と文字が多様化する傾向が見られる。木簡の他に、木製品として曲物類、桶の底板、性格不明の棒状品等があり、モモ・クルミ・クリ・ヒョウタン等の自然遺物も多く出土している。

遺構の性格は、出土遺物と集落南端に位置する点などから特異なものと考えられる。今回は、木簡出土遺構のみの部分的な調査でもあり、周囲に遺構の広がりや推定され、今後に側道部の調査が予定



木簡出土地（南から）

されているので、その結果を合せて詳しい検討を加えたい。

8 木簡の釈文・内容

木簡は四点あり、ヒノキ材の柁目・板目ともに使用している。

- | | | |
|-----|------------|-----------------|
| (1) | ・□□ □□□廣□× | (227)×20×7 019 |
| | ・□□ □□× | |
| (2) | 「九□□□三千□ | (121)×29×6 019 |
| | 〔林カ〕□□□□ | |
| (3) | □□□□□ | (95)×(19)×4 081 |
| (4) | ・□□ □□ | (68)×(9)×3 081 |

以上の四点とも伴出土器により八世紀に比定される。

（女屋和志雄）

栃木・下野国府跡

- | | | |
|---|---------------|---------------------------|
| 1 | 所在地 | 栃木県栃木市田村町 |
| 2 | 調査期間 | 一九八一年（昭56）五月～一九八二年（昭57）三月 |
| 3 | 発掘機関 | 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団 |
| 4 | 調査担当者 | 大金宣亮・田熊清彦・木村 等 |
| 5 | 遺跡の種類 | 官衙跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 奈良時代～平安時代 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

下野国府跡は、栃木市の東方を南流する思川の右岸沖積低地上に位置している。政庁跡は現宮延神社境内の周辺地区より検出しており、これまでの調査によってⅠ期からⅣ期に区分される建物群の変遷が明らかとなった。

政庁各期の建物配置は、前殿（東西棟）を中央部につくり、その東・西両側に長大な脇殿（南北棟）を構築するものである（正殿は未調査）。ただし、Ⅳ期になると前殿は再建されない。なお、Ⅱ期の東・西脇殿は瓦葺建物である。このⅡ期政庁は焼失している。四至の区画施設は、Ⅰ・Ⅱ期が掘立柱塀になっており、Ⅲ・Ⅳ期が土塁もしくは築地によって囲まれている。また、Ⅱ期塀の内側及びⅢ・Ⅳ期塀の内と外側には溝がめぐらされている。